

翻 訳

## トーマス・ムルナー 『ルター派の大阿呆』 (5)

名古屋初期新高ドイツ語研究会誌  
(代表 丑田弘忍)

### はじめに

ここに翻訳したのは、1522年に刊行されたトーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆』(Thomas Murner: Von dem grossen Lutherischen Narren) 第52章から第59章(終章)までである(第51章までは『中京大学教養論叢』第45巻から第48巻までのそれぞれ第4号に掲載)。底本としては、Franz Schultz 編集のムルナー著作集 Thomas Murners Schriften mit den Holzschnitten der Erstdrucke の第9巻(Paul Merker 編, Karl J. Trubner 社 1918年)を使用し、適宜 Joseph Kürschner: Deutsche National-Litteratur Historisch-kritische Ausgabe 第17巻第2分冊(G. Balke 編 三修社版 1973年)を参照した。聖書に関しては『聖書 新共同訳』(日本聖書協会 1987年版)に拠った。

この翻訳は、研究会のメンバーが月一回の研究会の都度各章を分担して訳し、共同で検討したものを、本論叢に掲載する際、再度検討修正したものである。但し、解釈の一致をみない箇所についてはその章の担当者に最終判断を任せた。2009年1月現在のメンバーは青木一行(名工大名誉教授)、丑田弘忍(中京大准教授)、工藤康弘(関西大教授)、精園修三(元中京大教授)、橋本忠欣(福井大名誉教授)、松尾誠之(愛知県大教授)、森昌弘(元中京大教授・名大名誉教授)、山田やす子(皇學館大教授)(以上アイウエオ順)の8名で、今回の各章の担当者は次の通りである。

第五十二章	青木	第五十六章	松尾
第五十三章	丑田	第五十七章	橋本
第五十四章	工藤	第五十八章	森
第五十五章	精園	第五十九章	山田

## 第五十二章 歡喜のうちに結婚式が挙げられたこと

ルタ -

さて、良き友であり

また、わが愛娘の婿でもあるムルナ - 君、

私は貴君に幸運と至福の来たらん事を祈る。

4035 神様が君たち夫婦をあらゆる不幸と苦しみから  
守り給わらんことを。

神様が君たち二人を万事において庇護なされ、

かくして君たちが幾多の麗しい子供たちに恵まれ

四世代もの永きに亘って

4040 子々孫々の永續を見ることになるよう私は願う。

いまや君はルタ - 派に組みし

婚姻可能なわが教団に入ったが、

我々はこの結婚を真実ともまた秘跡とも

考えて居ないのだ、

4045 たとえ君たちが教会に詣りず

聖別を享けなくとも良くなったとしても、

それは神のみ徴しるしを受けたものでもなければ

恩寵が与えられたわけでもないからであり、

たとえ二人が結婚しても、

4050 はなから我々にとって分明の事ながら

実際、この世のすべての人々は

結婚した状態で結ばれている事でもあり、

新約に照らしてもそれは

秘跡などとは云えないのだから。

4055 人々を祝別されるのは神であって聖職者ではない。

ここに式を催したのは

一つのテ - ブルに会し、楽しく食事をするためであり、

私達の悩みをすべて忘れ去るためだ。

私は聖職者の奥さん方<sup>(1)</sup>をすべて招いているが、

- 4060 皆さん、支障なく来てくれるだろう。  
 加えてまた奥さんを持っている聖職者たちも  
 お越し下さるだろう。  
 カ - レシュタットからアンドレ - ス殿<sup>(2)</sup>も来られよう。  
 この人も妻帯している。
- 4065 噂に聞くとところ、かのご夫人の信仰は  
 まるで長胡椒が胃の腑の中で  
 長く持ち堪え得ぬさまにも似て長続きしないのに、  
 この事を反省もせずむしろ、  
 ヴィテンベルクの大学で学生にうつつを抜かし、
- 4070 市場を徘徊しては、旦那さんはそっちのけの有様とか。  
 一体全体どうなっているのだろう。  
 一般信徒が戒心すべき事だ。  
 そういう人々が私たちと食事を共にするとしても、  
 私たちがあの人々に為てやったのと同様、
- 4075 私たちの苦勞は既にして報われたこととなるのだ。  
 私はすべてのベギン会の修道女たちをここに招いている、  
 彼女たちに課される戒律は厳格に過ぎる。  
 それとすべての修道院の婦人たちも併せ招いている。  
 この女たちは男との交わりを求めて、
- 4080 修道院内に納まっていられないのだ。  
 そういうすべての人々を私はここへお招きした。  
 さらに聖なる服を抛り捨てるような  
 そんな聖職者もみなご一緒だ。  
 それ故、わが親愛なる婿どの、
- 4085 貴君は結婚式の大宴会を控えて  
 ひたすら響応に努め、しっかりと準備なさるが宜い。

ムルナ -

皆さんが私の為に集まってくださったこと、  
 私は心から歓迎する。  
 諸君が私を見限ることなく、

- 4090 私の為に慶びの場に来てくれたのだから、  
もう一度重ねて厚くお礼を申し上げる。  
結婚式の場で感じる喜びの気持ちを  
その場かぎりの事として  
お別れするような事のないようにしよう。
- 4095 おおいに飲み、おおいに注いでください。  
ワインが飲み足らぬことなどさせはせぬ。  
珍味やお口に合うものも  
たっぷりとすべて揃えてある。  
有り難いことだ、諸君にも悦こんで貰いたい、
- 4100 修道女、修道士、そして司祭たちの秘めごとを  
大口開けて眺め得るその時を  
私がいま体験しているのだから。  
いま秘めごとと私が言うその意味は  
それがすべてを墮落させるとともに、
- 4105 しかもその全てを再び立ち上げ、  
混乱を元のように正すからだ。  
この事をどう考えるべきか以前の私には  
見当もつかなかった。  
快哉を叫びたいのは、私たち修道士・修道女が
- 4110 その秘めごとをすでにして明からさまな事とし、  
いまや配偶者を持てるようになった事だ。  
以前ならこれは恥ずべき事であったけれど  
それが名誉なことになったのだ。  
これに初めて手を染めた
- 4115 わが舅殿の教えのお陰にて  
私たちのこれまでの念願が叶えられ、  
妻帯できるようにして貰った。  
あの能無しの教皇カリクストゥス<sup>(3)</sup>は  
かつて私たちのこの願望を拒み、
- 4120 淫売女が密かに前垂れの下に隠し持つ喜びを  
私たちに対して拒んできたのだ。  
腐敗した貞潔など何の役にも立ちませぬ。

それよりベッドの支度をするほうがずっとました。  
 ここに居るルタ - の娘御の慶びのために、  
 4125 これなる気高い嫁御の榮譽のために、  
 どうぞ諸君、食事をして呉れ給え。  
 歡びのうちにすべては終わらねばならぬ。  
 本日私は万事に遺漏無き事を期している。  
 胡椒を召し上がって貰いたい、これは上物だ。  
 4130 どうぞ手を汚して貰いたい、  
 じっさいこの調味料は長胡椒ごとき劣悪品ではない、  
 カルカッタから到来の品なのだ。

ルタ -

親愛なる婿殿、まこと結婚式に相応しく  
 すべてが立派に揃っている。が、然し、  
 4135 その黒胡椒とやらが秘められて  
 どこに隠れているものやら。  
 みなさんがその黒胡椒については  
 特に不思議がっている。  
 噛みしめたと思ったら  
 4140 歯に挟まってしまって、  
 噛み切ることもできず、断ち切ることもできず、  
 噛み砕くこともできはせぬ。  
 これは肉でもなければ野菜でもない。  
 これは悪魔の皮膚じゃないのかなあ。  
 4145 口に入れてもまるで強靱そのもの、  
 誰にも噛み砕くことなどできわせぬ。  
 皆さんはまるでこうのとり鶴のようにそれを飲み込んでいます。  
 私にとってこれは不思議なことだよ。

ムルナ -

八八八、料理を味わっているうちに

4150 豆乳飯の中の下帯を飲み込んだと言うのだね。

このように盛大な宴会において

諸君が口に入れた下帯は、

まさに君たちが私に関し

各地において書物として出版せしめ

4155 みなの手に渡るようにしたのと同じあの下帯なのだ。

このたび返報ができて私も誠に気分が良い。

諸君がその下帯を飲み込んでくれたので、

胡椒や、全ての香辛料を提供した事を

私は後悔しないで済む。というのも

4160 あの下帯に依って私を侮辱した

この教団、この連中に対し、当然のこととして

私はそれらを準備したのだから。

忘れようたって私には忘れられはしない。

君たちはあれと同じ下帯と付け紐を味わわねばならないのだ。

#### 注

- (1) 原文では pfaffen frauen. als iez vil pfaffenfrau und der priesterdirnen ..harkom (hergekommen) sint. (Staub Tobler1. 252 (vom j. 1423). と Grimms WB. Bd. 13. にあるごとく並記されている言葉は同じ意味であって、pfaffen には妻であっても、高位の聖職者 priester にとっては端した女という、言葉の組合せの妙と云えよう。
- (2) Her Andres von karlestat はV. 867 において既出の人物。第 11 章の注 (6) を参照。ここでは既出の人物ゆえに敢えてアンドレ - ス殿もカ - レシュタットから参集されるであろうと言っているのであって、原文に Her Andres auch von karlestat とあるごとくアンドレ - ス・フォン・カ - レシュタットと事改めて云う必要もないほどの知己なのである。
- (3) babst Calixtas. この名を冠する教皇は 3 名居るがこの場合は教皇カリクスタス 世。本来の名は、ブルグンド伯爵家のギド。1088 年、ヴィ - ンの大司教、叙任権闘争をもって教皇として戴冠の後、1120 年ロ - マに赴き、対立教皇 Gregor 世を屈伏せしめた (1121 年)。1119 年から 1124 年まで教皇。1122 年、ヴォルムスの宗教会議の終結に伴って皇帝ハインリヒ 世との叙任権闘争を終結させた。1124 年 12 月 13 日、ロ - マにて死去。Balke の注釈によれば聖職者の婚姻を全面的に不当にして許すべからざる事と為したという。ただし彼の注釈で Calixtas の教皇在任期間を 1119 年から 1134 年としているのは明らかな過ちである。

## 五十三章 ムルナーの結婚式でダンスがなされたこと

ムルナー

- 4165 私の料理を味わったなら、  
料理が一層体のためになるように、  
ここで大いにダンスに興じなされ。  
私は女芸人を呼びたい。  
皇帝楽士の吹く笛よりも、  
一層上手に一弦琴を奏でてくれよう。
- 4170 一弦琴で楽しい気分を生み出すのに、  
あの女芸人より上手に  
奏でる達人はこれまでいなかった。

ルター

- ムルナー君、ダンスを始めなさい。
- 4175 我々も後に続いて、  
なににつけても楽しむつもりだ、  
さっと動いて、ぴょんと跳んで。  
私の娘の手を取って、さあ踊るんだ。  
最初のダンスは君からだ。
- 4180 だがダンスをうまくするために、  
まずは修道服を脱ぐのだ。  
私もやはり修道服を脱ぎ捨てた。  
修道服はダンスの邪魔になるからだ。

ムルナー

- 私が思い切って修道服を脱いでよいものか。
- 4185 説教師どもは目下私に厳しい。  
私はかつて結婚式で踊ったり、

コッヘルスベルクの農民踊りの輪に入ったり、  
おまけに楽しく跳び上がる

下品な踊りまでしたこともある。

4190 すると説教師どもはすぐにけしからんと言って、  
一人がただちに説教壇に立って  
私にこう説教した。

「修道士よ、お前は決してダンスをしてはならず、  
人前で踊り回ってはいけない。

4195 お前の修道会は、お前が  
女と踊るのを許すまい。

私は本当にお前を咎め、  
こう言わねばならない、  
ダンスはお前には相応しくない、と。

4200 ダンスは俗人がすることで  
お前がすることではない。

私はお前のために善意で言っているのだ。  
お前は他人の目の中のおが屑は見えるのに、  
なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか<sup>(1)</sup>。愚か者め。」

4205 もし私がダンスを始めたりすれば、  
今し方まですっかり忘れられていたことを、  
蒸し返すことになるう。

その上あの説教師が再び  
「すべからず、すべからず」と私を咎めるなら、

4210 それは私の苦しみとなろう。

町でも、田舎でも  
修道服を身に付けずにいるのは私には不名誉なこと。

あなたは修道服を脱ぎ捨てたので、  
多くの人が不快に思っている。

4215 私が修道服を脱がないのは、  
それを見たからだ。



## ルター

誓って言うが、説教壇に立って

ダンスのことを説教しただけの

4220 説教師がお前のダンスを

不快なものにさせたとは、お笑いだ。

そいつは他には説教の準備を何もしなかったのかもしれない、

前夜には乱痴気騒ぎをして

自分自身がダンスをしたのかもしれない。

あいつは修道士や修道女をひどく嫌っているくせに、

4225 自身は清貧な生活をしていない。

そんなたわごとを気にするな。

さあ、優雅に踊るんだ。

修道服のことなんかで争うことはない。

悪魔のことなぞほっておけ。

4230 修道会はすべて悪魔によってでっちあげられたのを、

お前はちゃんと知っているのだから。

## ムルナー

ここではめを外して楽しめというなら、

さあ、踊ろう、はすっぱちゃん。

弾きなさい、弾きなさい、かわいこちゃん。

4235 リュートで我々をたのしませておくれ。

こっちへ来なさい、見目麗しき君よ。

私はお前とロートリンゲンの踊りをして、

そのうえ説教には目もくれず、

パドヴァやヴェスターヴァルトのダンスもやるんだ。

4240 魂の救いを求めてじたばたしても、

地獄に墮ちるのは同じだ。

## 注

- (1) 4203 - 4 行は、次のようにマタイ伝 7, 3 がウルガタのラテン語文のまま引用されている。quid vides festucam in oculo fratris tui / et trabem in oculo tuo non cernis? 但し fratris 「兄弟の」はコンテキストから「他人」と訳した。

## 第五十四章 疥癬持ちであることを理由に、ムルナーがルターの娘を追い出したこと

## ムルナー

さあ、さあ、美しい人よ。

踊りはやめて

われらは禱<sup>しとね</sup>へ行こうではないか。

4245 あの者たちは下帯を飲み下すまで

酒をずっと飲み続けるだろう。

下帯を飲み込んで、酒で流し込むまで

まだ時間がかかるだろう。

婚礼の常として

4250 われら二人は禱<sup>しとね</sup>へまいろう。

横になりなさい、怖がることはない、

頭のベールをとりなさい、

今や私の前で恥ずかしがることはない、

私らは結局いっしょにならねばならないのだ。

## ルターの娘

4255 ああ、いとしいご主人さま。

大目に見てもらえるならば

今まで誰にも言えなかったことを

あなたに打ち明けたいのですが。

聞いてちょうだい、あなた。

4260 嫌がらないでね、私は疥癬にかかっているの。

指二本半の厚さで、

私の髪はこびりついてしまっているわ。

あなただけに打ち明けているのよ。

このことは他に言ったり、

4265 シャべったり、誰かに愚痴をこぼしたりしないでね。

他の点で私のことを好きなら、

疥癬のことは忘れて

私を世間の笑いものにしないでちょうだい。

後生だからお願いします。

#### ムルナー

4270 出て行け、こんちくしょう、

あやうくいっしょになるところだった。

むかつくあま、売女め、

出て行け、お前なんか雷に打たれてしまえ。

お前はルターの美しい娘でいながら

4275 部屋中臭うような

おぞましい疥癬にかかり、

それでもなお私のふしどに入ろうというのか。

さあさあ出て行け、遠くへ失せろ、

お前なんか二度と見たくない。

4280 言うておくが、お前を見つけたら

さんざん殴ってやるぞ。

むかつく化け物め、ムルニャン<sup>かかあ</sup>嬢、

疥癬お化けめ、私の傍らに寝るなど

金輪際考えるなよ。

4285 豚小屋の豚といっしょに寝るがいい。

#### ルター

おい、阿呆猫、なんてことをするんだ、

私の娘をこんなに殴り、

ぶって、罵って家から追い出し、

恥をかかせるなんて。

4290 こんな仕打ちを受けるかもしれないから、

お前には気をつけると前から言われていた。  
私のためにやってきた仲間たちに、  
お前は胡椒スープに下帯を入れて食べさせ、  
恥をかかせた。

4295 悪魔がお前に取り付いたのだらう。  
今お前は公衆の面前で  
私の娘を殴って追い出した。

#### ムルナー

お前に忠告しておくが、お願いだからほっといてくれ、  
お前の娘を私に押し付けるな、  
4300 さもないと永遠にお前の敵になるぞ。  
あの化け物は、臭いをかいただけで  
気を失うような疥癬持ちだ。  
親子ともども悪魔にさらわれるがいい。  
ところでお前は、結婚を秘蹟とすべきでない  
4305 とも教えた。  
結婚が秘蹟でないなら、  
私はお前に恥をかかせていないことになる。  
ふしだらな男と女は  
二人がその気になれば別れることもできる。  
4310 秘蹟が私を縛っていないのなら、  
お前の娘なんかくそくらえだ。  
あのおぞましい化け物は  
豚の脂身よりも、  
それどころか母豚の脂肪よりも厚い疥癬にかかっている。  
4315 化け物を連れて失せろ。

## 第五十五章 ルターがどの秘蹟をも受けずに死のうとすること

## ルター

おお、ムルナーよ、私の寿命もいよいよ

尽きる時がきた。

神のお情けは今終わり、

正しい判決が下されようとしている。

4320 私の命はもはやこの世を離れ、

今や死は必定だ。

死とは最高に残酷なことで、

人類にとって最大の苦しみだ。

だから今私はその恐怖に震えている。

4325 私がこれまでにお前を怒らせたことがあるなら、

いの一番にお願いしたいのは

それを寛大に許してくれることだ。

加えて私の最期に当たって

慰めの言葉をかけてくれ。

4330 そのことに対して天国の神がお前に

報いて下さるように祈る。

## ムルナー

いまわ きわ  
今際の際にある人に

同情しない者がいるだろうか。

今最期の苦しみがお前を襲い、

4335 魂がその体を離れようとしているのだから、

神もお前の罪を許されんことを。

そして私はお前がかってやらかしたこと

すべてをひっくるめて許す。

そのすべてが許されるのも

4340 全能なるキリストのおかげだ。

キリストが私の罪をも許し、

- 父なる神の恩恵を下さんことを。  
 ところでお前は更に  
 慰めの言葉をかけて貰いたがっているので、  
 4345 慰めの言葉の第一声は、  
 ぐずぐずためらうな、だ。  
 自分の罪を告白せよ、それがお前の身のためだ、  
 私の忠告に従えば間違いなく救われよう。  
 お前はキリスト教世界に  
 4350 不和を引き起こした。  
 それを心から悔やめ。  
 二番目の忠告として、  
 神聖なる秘蹟を  
 頂戴しておけ。  
 4355 これは神がお前を安らかに往生させるため、  
 またすべての苦しみから救い出すべく  
<sup>ホスチア</sup>聖餅をお与えになるためだ。  
 三番目の忠告として  
 秘蹟である聖油を自ら選べ、  
 4360 そうすればお前は上の三つのおかげで  
 この世から楽に素早く旅立つだろう。  
 この世での臨終に当たって  
 私がお前に与えることができる慰めの言葉はこれだけだ、  
 これ以外の慰めは神からもらえ、  
 4365 神はそれをお前に今の苦痛の後お与えになる。

## ルター

- 本当に有り難う、  
 お前はその言葉で私を楽にしてくれ、  
 私の悪行全てを見逃してくれたばかりか、  
 私がお前に加えた悪行をも許してくれた。  
 4370 しかし同時に告解せよと言うが、  
 それを私は現世ではやらない。

- だって現世で告解を受ける坊主どもを  
 任命したのは決して神ではない。  
 聖職者に現世でそうするのを
- 4375 許したのは悪魔だ、  
 聖職者なるものをでっち上げたのも悪魔だ、  
 だから私は坊主どもには告解しない。  
 しかし神には罪を告解するつもりだ、  
 もし私が心からその罪を悔やめば、
- 4380 神も限りないご慈悲でもって  
 私の罪をお許しになるだろう。  
 お前たちの司祭が捧げた  
 秘蹟であるカスチア聖餅を  
いまわ今際きわの際に受けるつもりはない、
- 4385 だって私はそれを単なる遺言と見なすからだ。  
 お前が私に与えたがっている終油、  
 それは受けない、いいか、私の言うことをしっかり聞け、  
 だってそれが秘蹟でないのは確実だ、  
 今この現在においても又過去においても。
- 4390 坊主どもの貪欲、強欲が  
 そうしたことを勝手に作りだしたのだ、  
 奴らの財布にあらゆる金目の物が  
 四方八方から入るように。  
 だからそうしたことで人々の信仰心が深まることはない。

## ムルナー

- 4395 議論したり、秘蹟について  
 話したりしている時でないのは確かだ。  
 死が迫っているのだ、手短に答えよ。  
 お前は、自分が引き起こした  
 キリスト教世界での反乱と不和を
- 4400 心から悔やんでいるのか。  
 さっさと考え、「はい」か「いいえ」で答えよ。

- もしもお前が死に臨んで告解する気になり、  
 秘蹟のパンを欲し、  
 加えて終油も望むならば、  
 4405 私間違いなくそうしてやろう、  
 それは、神聖なる神の書物によれば、  
 キリストご自身によって設けられたとあり、  
 正統キリスト教会が  
 希望し祝福していることでもあるのだ。
- 4410 もしもお前がこれらのことを理解しようとせず、  
 秘蹟なしでこの世を去り、  
 そしてそんな物いらな**い**と思っ**て**いるなら、  
 私はお前をかわや廁の便壺に投げ込み、  
 腐肉で埋まっているところに、  
 4415 糞便だけで埋葬してやろう。
- もしお前が自分の罪を悔やまないなら、  
 そうされて当然だろう。  
 とりわけお前は、我々が信頼を  
 寄せている秘蹟を廃止し、  
 4420 その上辱めたのだから。
- 是非とも聖母にお願いせよ、  
 この瞬間に力を貸して下さるようにと。  
 もはや死は目前に迫っているのだ。

## ルター

- 何はともあれ私はこの世におさらばする。
- 4425 お前が先ほど並べ立てた  
 秘蹟はどれも私の気に入らない、  
 私はそんなものに値打ちがあるとは思わないし、欲しくもない。  
 それにマリア様にもお願いしない。
- マリア様は、たとえ神と縁続きの人ではあっても、  
 4430 他の人と同様に人間だ、  
 他の全ての聖人と同様に人間だ。



その人間たちがどうやって私に力を貸すことができるのか。  
私が知っている聖人は神だけだ。

こうした考えで私は死を迎える。

4435 主よ、この苦しみにある私の魂を受け取り給え。

さらばお別れだ、くだらぬ世界よ、

私が報いを期待するのは神のもとでだ。

#### ムルナー

人間はこの世でどんな生き方をしようとも、

死が訪れるのは必定だ。

4440 しかしあのルターが喜びとしたのは、

平和を愛するキリスト教徒を

こうした不和に陥れることだけだ。

いま奴は諸々の悪事の報いを受けるのだ。

だからあの男を廁の便壺かわやにたたき込め、

4445 秘蹟を受けようとせず、

異端者としてあの世へ旅立つあ奴を。

どんな悪事もやってのけるならず者に

似つかわしい場所は廁の便壺だ。

#### 第五十六章 ルターの埋葬が猫の鳴きわめく中で執り行われること

私が聞いたルターの教えでは

4450 ミサは死んでからも

生きているときでも何の益もなく

更に煉獄でも何の役にも立たぬという。

ミサはそれを執り行う者の実入りになるだけだ、と。

ミサはそれ以外全く何の効力もなく

4455 更には善行<sup>(1)</sup>ですらなく

それを行うことは無益だから、と。

それは遺言<sup>(1)</sup>にすぎぬのだ、と。

どれほど熱心に人がミサを捧げようとしても

- これは捧げ物<sup>(1)</sup>ではないのだから  
 4460 誰の役にも立たぬのだ、と。  
 連中が野辺の送りをしたところで  
 それは金目当てのことだから  
 全てはくだらぬ行為だし、  
 葬式だとか一周忌だとかいうものや  
 4465 初七日や三十日のミサは騙した、と。  
 だからミサとはその程度のものとなる。  
 舅殿のことを忘れずに  
 その死に当たって大勢の猫を呼び集め  
 ミサを執り行ってやろう。
- 4470 人は私のことを猫扱いし  
 私に敬意など払わぬし  
 猫のことなど屁とも思わなかった。  
 舅殿の葬儀に来てくれるようにと  
 声を張り上げて頼んでも  
 4475 猫と同席して  
 私の顔を立ててくれることもあるまい。  
 それでは町でも田舎でも  
 私にとって大いなる不名誉となってしまうだろう。  
 だからお前たち猫どもよ、すっ跳んでやってこい。
- 4480 猫全ての名誉となるような  
 葬儀とすべくここで唄い上げようではないか。  
 私が唄い始めたら、後に続け。  
 音が高くなり過ぎぬように気をつける。  
 ただのニャーゴ・ニャーゴにならぬよう  
 4485 メロディーをはずさぬことだ。  
 黒猫に灰色猫よ、さあ来て  
 ニャーオまたニャーオと唄うのだ。  
 ムルニャーや阿呆ムルが  
 ニャーニャーと唄い上げ、  
 4490 テノール猫はニャーニャー  
 バス猫はまことニョーニョーと。

もしも私が猫でなかったら

どうしてこんなにニャーニャー唄えたらうか。

なぜ私にムルニャーの名前をつけたか

4495 今にしてようやく分かったぞ。

私がかくも見事にニャーニャー唄え

ここで舅殿のためのミサを執り行わせ

猫どもと一緒に野辺の送りができるからだ。

ここに猫どもが居合わせなければ

4500 ルターの葬儀も行われまい。

生前目指していたとおりに

死んでとむら吊われたことになろう。

全くもって、墓の場所も場所なら

歌の方もまさにおあつら誂え向きだ。

4505 ルターが長い間それに向かって努力したまさにそのように

葬式が行われたことになる。

#### 注

- (1) ルターのミサに対する考え方についてはグリムの辞書の OPFER の項の 1)c) )に引用された次のルターの文が参考になる。「...ミサは捧げ物とか我々の業わざではなく、神の与えられたもの、神からの贈り物、あるいは神の遺言なのであって、我々はそれを神に捧げることはできず、そうではなくて、我々はそれを神から受け取るべきなのであり、また受け取らねばならない...」 Luther: Kurtz Bekentnis... vom heiligen Sacrament. Wittenberg 1545. なお 4385 行を参照。

### 第五十七章<sup>(1)</sup> 大阿呆が病気になり、ムルナーが元気づけること

#### ムルナー

ああ天国の神様お助けを。

人の話では、わが親愛なる友の病気は重く、

死にかけている。

4510 友が死ねばつらい。

友は私の最高の喜びであっただけに、

あの大阿呆が死ねば

私にはもう楽しい時はない。

励ませるものかどうか

- 4515 私は友として見舞いたい。  
 今日は兄弟、  
     どうしたのだ、何に困っているのか、  
 一体何がして欲しいのか、欲しいものは何か、  
     言ってくれ、決してお前を見捨てたりしない。
- 4520 たとえ一千グルデンになろうとも、  
     すべて用立てよう。

大阿呆

- 困った時の友は、  
     真の友。  
 苦しい時の友が、
- 4525 この世で私の最良の友だ。  
 頭や耳や、  
     私の体のあらゆる部分を  
 お前は酷い言葉で  
     激しく祓い、
- 4530 私の体中を徹底的に調べつくしたおかげで<sup>(2)</sup>、  
     病気になってしまった。  
 私は正に死にかけていて、  
     治る見込みはない。
- 私は起き上がることも、横になることもできず、
- 4535 もう体の何処も動かせない。  
 ああ、どうか頑健なベギン会の女<sup>(3)</sup>を呼んでくれ、  
     ただし、処女でなければならんぞ。  
 修道女がドアの外で浮気をするために  
     私の看護をしているなどと妄想しないためにだ。

ムルナー

- 4540 ああ兄弟、そんな馬鹿な言葉は

この場に相応しくない。  
 自分の魂の救いを考えるべきで、  
 ベギン会の女の処女性などどうでもよい。  
 ベギン会の女たちがすべて本当に処女だということに、  
 4545 異論を挟む余地はない。  
 女たちは三つの誓いをし、  
 なるほど純潔を守り、  
 どの女も決して背くことはなかった。  
 だから私は一人呼んでやろう。  
 4550 誰を選んだとしても、  
 お前を起き上がらせたり、寝かしたり、  
 抱き上げたり、また座らせたりしてくれることになる。

大阿呆

結構だ、ベギン会の女を一人探してくれ、  
 どうしたって処女でなければならぬぞ、  
 4555 さもなければ断じてご免だ。

ムルナー

今お前が阿呆で縁者だと  
 分かっているならば、  
 私はお前から逃げ出すところだ。  
 頼む、さあ私の言うことを聞いてくれ、  
 4560 ベギン会の女たちは本当に皆処女で  
 貞潔で純な娘さんたちだと  
 もう一度お前に告げたい。  
 女たちの中に疥癬かいせんもちがしようと、  
 女たちの貞潔を傷つけるものではない、  
 4565 貞潔は心の内にあるものだから。

## 大阿呆

友よ、お前は女たちを信頼している

お前の修道会の女たちだからな。

ベギン会の若く可愛い子たちが

坊主の家に入っていき、

4570 毎週宴席にありついていることを私はよく知っている。

きっと情交しているのだと思う。

僧もベギン会の女も若い、

どうして老女たちなど入れてくれるだろう。

老女たちは家に閉じ籠っていないからならぬのだ。

4575 次いで市民の偉い連中ときたらもっと多くて、

神の荣誉のためだけだと、言って、

若い女をも客に迎える。

私はそれを褒めはするが勧めはしない。

連中は正式の妻を持ってないのだから。

4580 連中はベギン会の女たちを頂戴しているのだと思う。

女たちにはこんな宴がもり沢山。

女たちを病人たちのところへ行かせようとする、

行きたくない、

長虫のように体を曲げる。

4585 病人たちにはもう女の相手はできず、

女をだめにする。

しかし健康な男の処へは

いそいそすぐ出かけて行き、

上等のワインを飲んで、

4590 あとりのように歌い、

色目を使う。

こんなことは処女性などとは無縁で、

処女性にどう手を加えようと無駄だ。

## ムルナー

- 何たること、お前は病床についてまで、
- 4595      こんな馬鹿げたお喋りをしている。
- お前はすっかり弱って、死に掛けているのに、
- まだベギン会の女と情を交す話をしている。
- 情交話など
- 死ぬのには何の役にも立たない。
- 4600      だがもしお前が、ベギン会の女たちが坊主のところや、
- 正式の妻を持たず
- 若い修道女たちにだけ食事を提供し、
- 老修道女たちを悪魔へ税金として差し出すような
- 幾多の金持たちのところへ行くのを
- 4605      邪推しているなら、
- それは間違っている。
- だってあの子たちは、本当に信仰厚き者たちなのだから。
- 死に際し、馬鹿な話や
- 思い違いをやめるなら、
- 4610      世話をし、介護してくれる
- 処女を一人呼んでやろう。
- その女が処女で、
- まぎれもなく貞潔なのは分かっている。
- 女は七十八才で、それでも
- 4615      処女だ、本当だ。

## 大阿呆

- その女がそんなに長く処女で、
- その上ベギン会にいたのなら、
- 市民や坊主のところでの
- 食事に迎えられることはなかったのだろう。
- 4620      ああ兄弟、臆せず言ってくれ、
- 女は誰で、何という名なのか。

## ムルナー

その可愛い女は処女ヘーブネーゲル<sup>(4)</sup>と称していて、  
まぎれもない処女で  
杖を突いて歩くことはできる。

- 4625 なるほど部隊にいたが  
兵みんなから手もつけられず、  
老若の男たちから  
処女を守った。  
女のあそこは手付かずだ、  
4630 あの女も主人役の中に入って、  
上等な冷えたワインの呑助だったと、  
たびたび貶されはしたが。

## 大阿呆

おお、いやだ、いやだ、そんな女は沢山だ。  
ああ、そんな女は追い出してくれ、お願いだ。

- 4635 あの女は喧嘩早く、  
悪魔が取り付いている。  
あの女がいると、誰もうまくやって行けない。  
不和が起きる。  
柵のところで中に入りたがっている  
4640 豚のように金切り声をあげ、わめきちらす。  
あの女が尼僧院に入るや、  
安らぎは根こそぎなくなる。  
兄弟、外に追い出してくれ。  
女はほかの連中を全て売女と呼び、  
4645 とんでもないけんか女で、  
処女を自慢するが、  
その根拠はない。  
このご立派な老女帝は  
まんまとルター派になり、



4650 町のいたるところで

物乞いをし、

あるルター派の坊主のために

長い法衣をあてがってやった。

この坊主がベギン会の女をことごとく貶し、

4655 処女性について説教し、

自分の体ときたら

見事な魚網のように完全無垢だ、と言う約束になっていた。

私はあの女も、ベギン会の女もお断りだ。

さらばだ、さらば、逝くぞ。

4660 私の体はお前に任せる。

#### ムルナー

親愛なる友よ、神のお慈悲がありますように。

私は別の阿呆どもがいる所へ行く。

#### 注

- (1) ムルナーと阿呆との会話。この阿呆とはルター派を戯画化した大阿呆のこと。ムルナーの構想では、頭目ルターを死なせたからには、大阿呆も死ななければならない。
- (2) 大阿呆を被うことは、大阿呆の体の中にいるいろいろな小阿呆どもを引き出し、暴き、槍玉に挙げることである。まず頭(7章参照)に始まり、腹(91-25章参照)に移り、足元の靴の中(39章参照)、さらに耳(42章参照)へと阿呆を被うための探査が続いた。
- (3) 12世紀終わり頃現在のベルギーで創立された女たちの結社。修道会の誓約や規則もなく自由な世俗的なもので、信仰に基づく敬虔な生活、慈善活動、病人の看病などを目指した。しかしその特異性から正統派の教会からは迫害され、ドイツでしか存続できなかった。後にベギン会は宗教改革と結びつくことになる。中世末期には規律や秩序の緩みから、自堕落なお祈り尼という蔑称を頂戴することにもなった。ここに登場するベギン会の女は蔑称を頂戴する類の女であろう。
- (4) 原語は hebneigel で、negel < nagel は「陰茎」の隠喩、heb は heben 「立たせる」の命令形。

#### 第五十八章 大阿呆が丁重に埋葬されたこと

地位と名誉を得ようと努める

名士が亡くなれば、

4665 世の中のどんな人でも

- その死を悼み、葬儀に参列せねばならぬ。  
 善行はこの世で報いを受け、  
 それに相応しく神に迎えられねばならぬ。  
 それで私は今大阿呆の
- 4670 縁者の方すべてに、埋葬に  
 参列して下さるようお願いする。  
 大阿呆に好意を寄せる人、  
 自らも阿呆の一人である人、  
 或いは自分で
- 4675 悪ふざけをやってのける人、こういう人は  
 大阿呆の葬儀に参列してください。  
 大阿呆の縁者で  
 骨を折り苦勞をして  
 大阿呆について進み、
- 4680 一緒に走り回り、  
 寒さの中で馬ぞりを引き回し、  
 雪の中で凍えた人々すべてを、  
 大阿呆はなんと苦しめたことだろう。  
 馬は大変苦勞をしたが、
- 4685 その場で大阿呆を助けた。  
 連中の誰でも二、三十年余り  
 阿呆を身につけ、  
 頭の中や肌の下に阿呆を入れて、  
 大阿呆とそりでやって来た。
- 4690 しかし阿呆であることが不利になることはない。  
 若い時からはくく育み、  
 世俗も聖職もひっくるめ、  
 ずっと背負って行かねばならないのだから、  
 阿呆であることを恥ずかしく思ってはならぬ。
- 4695 ああ、埋葬するのを助けてやれ、  
 お前たちも同じことをしてもらいたいのだから。  
 お前たち阿呆が出発すれば、  
 みんなついて行くだろう。

- 埋葬に参列する気のない者は、
- 4700 確かな証明書を持たねばならぬ。  
判を押した文書を出さねばならぬ、  
決して阿呆になる積もりはなく、  
以前も阿呆でなかったという証明書を。  
それがあれば葬儀への参列は免除される。
- 4705 しかし我々は押印文書は受け取らない、  
ルター自身が書いたもの以外は。  
我々はこう確信するからだ、  
ルターは判を早く押さないで、  
ゆっくり進めて、誰が阿呆に
- 4710 逆らおうとするかをよく調べると。  
それに逆らえない者は、  
大阿呆の埋葬に参列せねばならぬ。  
なにしろ大阿呆は我々を喜ばせ、  
多くの人が死ぬほど笑ったのだから。
- 4715 どんな人も喜んで、  
みんなの兄弟を墓地へ運ぶのを手伝い、  
心を込めて言ってやれ、  
「汝に永遠の安らぎを与え賜え、  
大阿呆たちが生きる
- 4720 天国をも与え賜え」と。

#### 第五十九章 大阿呆の遺産をめぐるけんかや争いが起こったこと

- さあ、大阿呆と最も近親の  
縁者のみんな、聞いてくれ。  
お前たち全員に包み隠さず言うが、  
大阿呆は私に財産を委ねた。
- 4725 つまり、私が遺言執行人であって、  
財産を上手く、適切に分配するように、とのことだ。  
大阿呆と最も近親の者がいれば  
まずはその人が遺産を手に入れるべきだろう。

- だが遺産は大阿呆が私に委ねたときのまま  
 4730 しっかりと封印されている。  
 ルターは、最も近親の縁者が相続すべきなのだから、  
 自分がしかるべく相続する、  
 というのも、自分がいかに大阿呆に好意を持っていて、  
 また大阿呆とそっくりだということは  
 4735 十分に明らかであるし、  
 正真正銘の阿呆なのだから、と言っている<sup>(1)</sup>。  
 ルターの冊子は我々に、  
 やつも大いに馬鹿げたことができることを示しているし、  
 またやつは、自分が最も近い縁者であり、  
 4740 他の誰よりもずっと関係が深い、と言っている。  
 その時カルストハンスも名乗りを上げて、  
 私に自分の冊子を差し出し、  
 これはとてもよくできているので、  
 世間の人々がみな笑った、  
 4745 そして、自分が最も近親の縁者だということは  
 冊子の中で世間に普く知れ渡っている、と言う。  
 すると、打穀棒を持った農夫も名乗って出るし<sup>(2)</sup>、  
 ルターのハンスは私生児を連れてくる<sup>(3)</sup>。  
 その上、『カルストハンス』の中で鷺鳥の雛を孵した  
 4750 学生<sup>(4)</sup>が連中と一緒にやって来る。  
 また、竜の顔をした無頼漢がやって来て<sup>(5)</sup>、  
 そいつもここで縁者になろうとする。  
 さらにその上、私が異教徒であるトルコ人のような生活を  
 していると行って、私を罵った  
 4755 詩人も加わる<sup>(6)</sup>。  
 連中はみなここで遺産相続人だと言い張り、  
 最も近く、最も深く  
 大阿呆と親類であると言うために、  
 私に対して書いた  
 4760 押印文書や立派な冊子や  
 くだらない作り物を見せて、

- 誰もが、自分は完璧だと言っている。  
だから私は助言してやるつもりだ。  
「誰もが遺産を相続したいと思っているが、  
4765 その遺産は大したものではなく、  
阿呆頭巾にほかならないのだから、  
頭巾を求めて力づくで殴り合え。  
そして殴り合いにおいて最も強くて  
遺産を手に入れる人、  
4770 阿呆頭巾はその人のものだ。  
その人は阿呆頭巾を家へ持ち帰り、しかるべく使って  
うまく生計を立てるがいい」と。  
だが、当然の成り行きに従えば、  
私がすべての人に優先して阿呆頭巾をもらうべきだろう<sup>(7)</sup>。  
4775 というのも、まさにこの本が、私が最も近親の  
縁者であるということを証明しているからであり、  
また、実際大阿呆は私と親戚なのだ。  
他のやつらが書いた本なんか問題にならない。  
もしこの遺産相続からはずされたら、  
4780 私はものすごく不愉快だ。  
連中は書きたい放題書いたのに、  
愚かな仲間たちは連中に対して  
大阿呆を引き回さなかった。  
そしてそうすることでうまく如才なさを示した。  
4785 実際、もし連中が私のことを  
最大の阿呆だと思っていないなら、  
連中は大阿呆を引き回させたりせず、  
私に敬意を表すためにそんなことをしはしなかつただろう。  
さて私は、私の遺産相続権を否認しないという  
4790 証明書を持っているので、  
阿呆頭巾が私に与えられる  
のも当然だ。  
けれども私は、誰が阿呆頭巾を手に入れるべきかを、  
みんなの裁量に任せる。

4795 私はそのために最善を尽くした。

誰になにができるか、神が決定されんことを、云々。

なお、この本は神聖ローマ帝国皇帝にしてスペイン国王の特別許可を以て、恩寵により印刷されたものであり、この本を五年間は複製してはならず、もし複製されても、神聖ローマ帝国においてそれら売ってはならず、違反した場合には純正金十マルクの科料となる。すべてはそれに関する書面文書の権限と内容に従って記されている。私は書面文書の開示を求められれば隠すつもりはない。またこれをもって各人に警告した。

この本はシュトラースブルク市民ヨハネス・グリーンンガーにより、我らが主キリストの生誕後一五二二年の年の聖ルツィアとオッティリアの日の後の金曜日に<sup>(6)</sup>完成された、云々<sup>(9)</sup>。

#### 注

- (1) ルターは、第五十五章および第五十六章においてすでに死んで葬られているが、ここではまた生き返って、大阿呆の遺産相続争いに加わっている。
- (2) Merkerによると、1522年のパンフレット"Der gestryft Schweizer Bauer"のことであろう。
- (3) Merkerによると、どのパンフレットのことか不明である。
- (4) この学生はカルストハンスの息子である。
- (5) Merkerによると、1521年に出版されたNicolaus Gerbel作の"Murnarus Lviathan"のことである。
- (6) Merkerによると、Nicolaus Gerbel作の"Defensio Christianorum"のことである。
- (7) ここからは作者としてのムルナーが登場する。
- (8) 1522年12月19日。聖ルツィアとオッティリアの日は12月13日。
- (9) これは初版の後記としてグリーンンガーにより書かれたものであるが、第二版の後記は次のようである。

この冊子の作者は、連中が作者をからかうために大阿呆を引き回したからだ、部分的に序において弁明している。しかし、作者がことさら弁明するのは、連中が、作者ただ一人に罪を帰したことである。すなわち連中は何百冊もの冊子を匿名で作者をねらって出版させたのである。それゆえ作者は、誰でも自分の名誉を守るのは当然だと思っている。さらに作者は私に、このささやかな本は誰をも侮辱するものでなく、阿呆調で書こうとしている、とも言った。それ故、私ヨハネス・グリーンンガーは、印刷で生計を立てねばならぬ身でもあり、また印刷が私の商売でもあるので、これを引き受けた。私の手により、誰の利益のためでも、また誰を害するためでもなく、我らが主キリストの生誕後一五二二年、聖ルツィアとオッティリアの日の後の金曜日に印刷された。